



私たちは何処に行こうとしているのか

田中伸尚さん講演会・聴書

紹介頂きました田中です。大分には何度か来ていますが、ほとんど取材で、こういう形でお話しするのは始めてかと思えます。大分の9条の会は割と全国的に知られているようです。ご存じのように高橋哲哉さんなどがお見えになってお話ししておられるようですが、私はできるだけ現場を歩き人と接し、資料を調べていく中で感じてきたことを文字にするということ、40年やってきましたので、現場を踏まえた私の思いを語る事になろうかと思えます。

タイトルとして最初に頂いたのは『戦後最大の危機・問われる「国民」』というものでしたが、このタイトルでは近づきがたいと思いましたが、『私たちは何処へゆこうとしているのか』ということになりました。内容的にはそれほど違いはないのですが、案内文にあります、「国民」という言葉に包み込まれて国家の思いうような方向に導かれていくという、戦前戦中の反省として「国民」というのは何なのかを考え直そうという、20年近く前に出された本『さよな

ら「国民」という本をお読みになってこの題になったのかと思っています。

シヨパンと治安部隊



でしたが、3日前に出版されました本『抵抗のモダンガール・作曲家・吉田隆子』があります。後ろに並べて販売しておりますので、興味のある方はお読みください。

戦後69年、節目に立とうとする今、私たちがどういう処にいるのか、ということを抑えておかねばならないと思えます。その上で『何処に行こうとしているのか』ということになるのかと思えます。このことは簡単に答えが出るものではなく、それぞれのところで考えていく他は無いのだと思いますが、その手がかり・ヒントになる話が出来ればと思えます。

一定の失業率は必要だ
スラムがなければ
海兵隊員がいなくなるから
-誰も望まない絶望的な社会-

日本国憲法 第9条
日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

出発の前夜になって幾つかの資料をお送りしましたが、写真が旨く読み込みないうこと、写真は資料としてお配りできません

私は昔、朝日新聞の記者をやっていました。その後40年近くフリーでものを書いてきましたが、できるだけ現場に行つてそこで話を聞いて考える。あるいは“自由とか平和”というものを基本にしながらものを見つめ、“国家と個人”と

いうものをテーマにしなが
らやってきました。ですが
ら多くは国家が不条理に個
人を踏みにじつていくよう
な出来事に、抗^{あが}つて生きて
いる人の姿を書いてきまし
た。今日は最初に写真を見
て貰^{もら}ってと思^{おも}っていたので
すが、上手くゆかなくて残
念なのですが、4月の5日
に『東京新聞』・発行部数
は多いのですが地方紙、い
ま反原発のことをメインに
一生懸命やっている新聞な
のですが、坂本龍一さんを
中心に世界の出来事を1枚
の写真で伝え用という企画
の、1回目に報道されたも
のⅡ〈写真のチカラ〉ショ
パンと治安部隊Ⅱを見て強
い衝撃を受けました。ずら
りと並ぶジュラルミンの盾
を持った治安部隊、その前
に立ちほだかる一台のアッ
プライトのピアノ。1人の
男性がショパンのワルツを
弾いているという写真で
す。これは、最近ウクライ
ナで政権交代がありました
が、新しい体制に抵抗の意

思表示をするための一コマ
なのです。ウクライナ出身
のピアノリスト、マルキヤン・
マツェフという人で「私た
ちは治安部隊と戦っている
のではなく体制と闘ってい
るのです」と。この時1曲
を弾いただけなのですが、
もう一度弾くことがあつた
ら「ジョンレノンのイマジ
ンを弾きたい」と。

10年以上前になるうかと
思いますが『戦場のピアノリ
スト』という映画がありま
した。第2次世界大戦の時、
ナチスドイツのポーランド
侵攻以降、殆ど無人となつ
たワルシャワの廃墟の中を
生き抜いたピアノリスト・ウ
ワディスワフという人を描
いたものですが、その『戦
場のピアノリスト』というも
のを思い出しました。国
家なり、体制の機構が民衆
を弾圧するとき、それに抵
抗する形はいろんな形があ
るのだと衝撃を受ける形で
知らされたわけです。「憲
法9条にノーベル平和賞
を」という運動があります。

60年・70年の労働運動や学
生運動などのキャリアを
持った人の発想ではなく、
30代の女性が始めた運動で
す。どういう効果があるか
というより、そういう発想
が大事なのだと思います。

何もかもが崩れていく社会

今の社会をととても息苦し
く思っている人と、そうで
はない人がいるようです
が、私なんかは生きづらく
苦しい感じを持つのです
が、小倉に住んでいた在日
韓国人の2世になるピアノ
リストでチェ・ソンエさん
という人がいます。指紋押捺
に反対して21歳でアメリカ
に留学、押捺を拒否したた
め再入国できなくなったの
ですが、10年以上指紋押捺
運動で戦った人です。その
お父さん・崔昌華(チェ・
チャンホア)さんのことを
今書いています。そのこ
とのために、お子様たち
や、チャンホアさんと交わ
りのあつた人の聞き取りを

してきたのですが、北朝鮮
に生まれられ、様々な事件
に遭遇し、南に渡り、牧師
になられた方です。その後
日本で在日の外国人の人権
活動をなされ、95年没。お
父さんの事についての取材
をする中、娘さんのソンエ
さんは「今の日本の社会
は何もかもが崩れていく、
本当に怖い」と言いまし
た。大分にあるかどうかは
知りませんが、在日の人た
ちに向かつてヘイトスピー
チを毎週繰り返し返している凄
い団体がありますが、ヘイ
トスピーチだけのことを
言っているのではなく、今
の日本の全体の空気に対す
る恐れを身体で感じている
のです。それから1週間ほ
どたつて、四国のお遍路道
に「大切な遍路道を朝鮮人
の手から守りましょう」と
いう張り紙があつたという
ことが、報道されました。

日には阿波市でも見つかつ
たと言ふことです。在日の
韓国・朝鮮人に対する排他
的な感情が、過去の歴史で
は東京大震災の時に朝鮮の
人たちが数千人(6千人と
も言われている)虐殺され
るといふ事件に繋がりました。
その時の空気と重ね合
わされるような感じがする
のです。1923年とは
少し違うのかなと思うの
は、四国48ヶ所の霊場巡り
で、外国人として始めて先
達(修行を終えて案内人に
認められた人)となつた、
チェ・ソンエさんは、それ
にめげないというか、「そ
れでも日本を愛している」
というコメントを出してい
ることです。「霊場会」が
張り紙を止めるようにとい
う協力要請を出したり、先
達を認めたりということ
は23年当時にはあり得なかつ
たことだと思ひます。しか
し、戦後築いてきた歴史モ
ラルとしての排外主義から
の脱却、それが崩れてきて
いるのではないかというのが

チエさんの中にある不安ではないかと思うわけです。

貧困と右傾化

2月の都知事選挙で、極右の田母神俊雄というひとが、60万票を越える得票を得ました。私の予測は10万票くらいでしたので、状況認識の甘さを知らされる出来事でした。しかも出口調査で、20代から30代の若い人の田母神さんへの投票率は30パーセントを超えていたと言います。20代ではトップであったということは驚くべき事だと思えます。投票日の前日に池袋でたまたま田母神さんの演説会を見た人が、その場は「AKB48」のような若い人の熱気で一杯だったと。

3月1日付の朝日新聞に、シカゴ大学のノーマ・フィールドさんという人のインタビューが掲載されています。この中で彼女は「知人によると、日本のある小学校で『平和』という言葉

葉を使わないように」と言われたそうです。戦前・戦中に平和は『××』と伏せ字にされたことが多かったのですが、いままた、敗戦直後に日本人が真剣に議論したことがゼロになりつつあるように思います」と。また安倍首相の靖国参拝に對して「大国の静止も気にならないような空気が漂いつつある。それは非常に怖い」と。さらに「『強い国』を主張する田母神俊雄さんに投票した若い人。「最初に戦場でいる若者が右傾化を支持する。それは、近代史の忌まわしいパターンの一つだと思えます」というふうに仰っています。彼女は日本文学、源氏物語から入った人ですが、自衛官合祀反対運動の中谷さん、長崎の本島さん、そして沖繩の知花さんなどに注目したり、経済にも詳しい方です。経済の衰退というところで『生活と生命の乖離』ということを言っています。「経済的に一番弱い人が、自分

の生命さえ犠牲にする」ということをあげています。「人が押しつぶされそうになつている状態というのは、支配者にとつて、とても都合がいい」と。バブルの崩壊や、失われた20年という言葉で表現される、ある崩壊の時期、若い人たちが希望を捨てなくなると「今日と明日の生活が確保できれば将来はどうなつてもいい」ということになりまます。そうなればいのちの問題や平和の問題は射程の中に入りきれず、無意識の中で戦争を支持することになつていくのだと、彼女は指摘しているのだと思われまます。

戦後の繁栄と平和

私は20年程前に、ノーマ・フィールドさんと雑誌『世界』の中で対談をしたことがあるのですが、その対談は『さよなら「国民」(一葉社)の中にそっくりそのまま掲載されていますので

興味があればお読みください。その中では「戦後の日本の平和と繁栄」という言葉について議論が為されたのですが、ご存じのように戦後、朝鮮戦争をバネにして復興の道を辿ってきました。60年代に労働運動があり、その中でベトナム戦争(1960-1970)にも反対の意志を強く示したということがあります。労働運動や反戦運動が展開される中、63年からであったと思えますが、池田勇人が岸の後を受けて「所得倍増」を言った年から、「平和と繁栄」という言葉が意図的に使われるようになりました。戦争犠牲者の追悼という形で、日本の平和と繁栄は「戦争犠牲者のおかげである」というコメントを出し続けるわけです。「平和」と「繁栄」と「犠牲」がセットになつて使われる。「犠牲者のおかげで」と言い続けるのです。政府は8月15日というものを「終戦記念日」とし、8月15日を迎える度

にその言葉が繰り返されるわけです。敗戦を終戦とたくみに言い換えて、三点セットを繰り返し呼びかけてきたのです。犠牲によつてもたらされたものである限り、戦死者は「感謝されるべき存在」だから「英霊として祭らねばならない」ということになり、そこに「靖国」という問題が入ってくるわけです。総理や内閣・衆議院議長も裁判所の長官も決して「謝罪」とか「反省」という言葉は使いません。

バブルがはじけた後、失われた20年というものが登場してきて、「平和なんかどうでも良いんだ。今日、明日の生活のほうが大事なのだ」と言う意識が蔓延してきました。そして、「繁栄が消えていくそのピークが3・11だ」と。ノーマ・フィールドさんは、これまで述べてきたようなとらえ方をして警鐘を鳴らしています。

福島の現実は何も解決さ

れないままに、平気で「再稼働」し、輸出までしようとする今の政財界の状況は「政治モラルの退廃」としか言いようのない状況であります。

解釈改憲というまやかし

広島に平和教育研究所というものがあり、平和教育に熱心な県でしたが、99年、広島教組が潰されていきます。バブルの崩壊とほぼ同時に、社会と政治のモラルの退廃ということが起こります。その最たるものが「集団的自衛権」を巡る政府のやり方だと思えます。絶対に越えてはいけない一線を「解釈改憲」という言葉で、越えようとしているわけですね。法律家に聞けば「解釈改憲」という言葉はないのだと言います。改憲は、改憲の手続きを踏んで始めて成り立つのであって「解釈」をもって改憲するということはありません。しないのだと言います。しか

し解釈改憲という言葉が新聞などで普通名詞のように使われて、保守系の自民党議員や内閣法制局長官ですらやってはいけないということ、安倍総理は平然と集団的自衛権の行使をやるうとしていくわけです。完全に「憲法破壊」ですね。

それに手を貸す学者や研究者がいるということは許し難いのですが、1930年、戦争を遂行することに手助けした学者や研究者が沢山いたわけですから、そういうことも念頭に置いておくべきかと思えます。安部さんの「私的懇談会」というやり方、それを最初にやったのは中曾根康弘です。彼は私的懇談会というものを沢山造って、それが「民意」であるかのように装ってゆく。その結果、ゆき詰まった靖国国家護持法案を、靖国神社の「公式参拝」という突破口を作ったわけですね。ただその事は国際世論が許さず、国内でも「靖国訴訟」というかたちで、

身動きの出来ない状況が生まみ出され、その後、総理大臣が靖国に公式参拝するということはなかったわけですね。それを破ったのも安倍総理だということを忘れてならないのだと思えます。(文責・日野詢城 次号に続く)

田中伸尚さん講演会感想文

※ 長時間があつという間でした。とても具体的な話として伝わってきました。

身近に迫った日本の未来の危機的状況に対してこれだけの話を……。もつと多くの若い方々に参加を呼びかける取り組みをしたかったと残念です。18歳からの投票が始まる時代を迎えようとしている今、思いの輪を繋いでいく手立てを何とかしなければと、このような機会がもつたいないなあと思えます。私たちの世代の大事なテーマです。

※ いま国際社会全体で、若者の右傾化が懸念されて

いるが、閉塞された社会で未来に希望を持ってない不満、ないしは絶望感が若者の行動背景に見えます。貧困と差別、格差の問題はますますそうした状況を生み出し、拡大するだろうと危惧します。

田中さんのお話にあつた「生活と生命の乖離」はまさにその通りだろうと思えます。私は少し中国に関心を持っていましたが、個々的には友好的に感じる若者たちが、一方では反動的な行動にも走っている現実があります。大学を出ても安定した職が得られない。こうした閉塞経済の打破こそが大事だろうと思えます。歴史学習の大切さ、国際社会に通用する歴史認識の大切さを思う。日本は中国に何をしてきたのか。韓国(朝鮮半島)にどう対してきたのか。若者の歴史感覚の欠如が、まさに右傾化の底流にあると思う。

編集後記

※ 押しつぶされそうな重圧感を感じているのは、若者だけではない。いつの間にか「自立」という形で家族の絆も希薄なものとなり、孤独な老後を過ごす人は少なくない。

※ 戦後失ったものに歴史感覚があるとおもう。「この世は生者のみの世ではない、死者と共にある世なのだ」と遺言を残したのは上原専祿という歴史学者だ。先人を訪ねる心を失えば、一瞬にして消える「今」だけが問題となり、夢や希望もなくなってしまう。俺たちは歴史を紡ぐジェネレーターだ！もつと誇りを持つよう。(詢)

赤とんぼの会・平和講演会

とき／7月19日(土曜) 開場 13:00
開演 13:30

会場／ホルトホール大分 3階大会議室

入場／無料

『時代の子』として
講師／作家 澤地久枝さん

主催 赤とんぼの会
連絡先 090-1166-4218

